

春燈

March 2015

3 月号



主宰の句

安立公彦

年の夜の閑けさに凭る机辺かな

万葉の仮名うつくしや初暦

一眸の枯生彩る初日かな

冬晴を眩しと思ふ身の翳り

松のこゑ風の声聴く三日かな



安住敦の句

麦秋や箒かつぎて箒売

『古暦』昭和二十九年

柿の木坂のお宅の句会へ毎月通った昭和二十年代後半。門川が流れ、その向こうはまだ畠だった。そこへ箒売が通る。麦秋と箒売が引き合って動かない。しかし今、全く別のことが私の頭を横切る。J・コクトー監督の映画「オルフェ」。死の世界へ通ずるキリコの絵のような町を、ガラスをかついだガラス売が通る場面。安住先生とコクトーの詩について語り合った懐かしい記憶と共に。

中村嵐楓子

安住敦の句

ある日真砂女葱の高値を嘆じけり

『午前午後』昭和四十六年

一読して真砂女が身近になる。毎日魚河岸に通ったほどだから価格の動きは身をもって実感したに違いない。だが、話題にしたのが大層なものではなく脇役っぽいものところが大事だ。俳句の集りの合間、くつろいだ時間の間話でもあろうか。真砂女のこぼした言葉をさりげなく掬って、彼女の可愛らしさを諧謔味をもって見ているように思われる。その卯波も今はない。

小泉 貴弘

燈下集



○ 日溜りは仮の現世冬董

失せしもの探しに鳩の潜るかな

刈込みし木々の小庭も初景色

青空へ未完校舎の淑気かな

鏡餅に罅ストレスと思ひけり

○ 植田初美

○ 沼田桂子

静止画のやうな煙や冬晴るる

偏屈な一羽の鳥とみかんの木

古日記青春の跡瑞々し

此の国の行先見えぬ冬夕焼

歳晩や星を宿らせ海眠る

○ 佐渡谷秀一

○ 秋場貞枝

新築の家の灯ともる師走かな

広告の大きな笑顔冬の駅

厄祓と言ひて過ぎたる冬至酒

蠟燭の炎の骸や年惜しむ

息声のささり山茶花ちりにけり

淮南子の青女の声を聞く夜かな

紙漉や楮の絡む音乾ぶ

賀状書く硯の海の青さかな

福笑ひ子らの昔を懐かしむ

人日や亡母の流儀確かむる

○ 宮田 豊子

誰も来ぬ元日の庭風静か
いつも同じ厨の景色林檎匂ふ
本音てふ隠したきもの寒の雨
眞贋を問ふ焼物や冬ざるる
臘梅の香に集ひけり書院床

○ 佐々木 新

襦袍宿トンネル幾つ抜けて来し
冬晴や碧のダム湖に鳶の笛
海原の果ての山脈冬うらら
昼の日の仏間に明き冬至かな
年用意あらかた死語に老い二人

○ 呂 秀文

冬濤の渚を飾る白フリル
凍てる指だましましたましてポタン掛け
冬麗南は米の三期作
饒舌の口に蓋する大マスク
過疎村のひとり暮しや寒灯下

○ 呉 文宗

俄かなる信者も愉しくリスマス
数へ日やシニア大学合否なき
父を知る耆宿の語り冬座敷
切なげに立ち尽くすパイロン小夜時雨
尻取りは阿吽で締むや除夜の鐘

○ 陳 妹蓉

賑はひに異国を見たるクリスマス
目の眩むセールの飾りクリスマス
大聖樹神よご照覧賜れよ
古駅舎旅の疲れの冬日かな
鈍り勝ちの五感呼びさます冬の雷

○ 井上 正子

横浜西洋館の錦絵や初暦
大旦カメオの似合ふドレスかな
窓越しに覗く一羽の初雀
相手無く歌留多の一人遊びかな
江戸縮緬人形に着せ三日かな

春燈賞(抄) 25句 自選

西岡啓子

薄氷の小さき風をとらへけり
人に会はぬ道の長さや木の芽暗
初蝶来こころの灯点しけり
空仰ぎ樹々をあふぎて春なかば
あたたかや日差をかへす草の艶
杭のぼる池のしめりや鳥雲
散り敷きてなほ満開のさくらかな
ふるさを捨つるにあらざ母子草
父の日の空いくたびも仰ぎけり
水無月の人づてに知る話かな

うちなびく夏草の丈敦の忌
初蟬や日々のくらしにやや慣れて
椅子一つ庭に置きある夜の秋
ひと気なき米屋に回る扇風機
風ぬくる竹百幹の晩夏かな
生きてると母宣ふやつくつくし
筑波嶺は目の高さなり秋日和
桔梗の明日咲くゆるびありにけり
指添ふる筆の久しき良夜かな
ふり返る帰燕の空の高さかな
秋雨やかがる糸選る手芸店
秋の日や砂のきらめく水の底
林檎むく幸せの香をこぼしつづ
立冬や夕べ明るき日のさして
冬ぬくし一樹につどふ鳥の声

(夫退院)

当月集

安立 公彦選



○ 繰り返す同じ反省曆果つ

民宿の朝の茶粥や笹子鳴く

半音の鳴らぬ鍵盤雪催

自転車の荷台とび出す葱の束

地下道に靴音響く寒の雨

○ 豊谷ゆき江

○ 中村紀美子

吊し柿板戸に影を並べけり (神奈川支部大会句)

太柱支ふる礎石冬日濃し

大屋根の反り小気味好し冬の空

野袴の鷹匠の技目のあたり

しぐるるや轆轤を回すこけし村

○ 西岡啓子

銀杏落葉踏みてところを軽くせり

境内をゆつくり抜けて冬ぬくし

径形にめぐる古民家日短か (日本民家園)

連れ立ちて心強き日三十三才

年の夜の星空仰ぐしづけさよ

○ 藤丸誠旨

寒々と手を握らする余命妻

時待つに除夜の笛吹く葉缶かな

壁染みを数ふる部屋に年果てぬ

君よめる対座の詩や福寿草 (祝・佐渡守さん)

生まるるも死ぬるも一度初湯かな

○ 浅木ノエ

保健室の固きシートや冬の鵪

ポインセチア叫んでみたき日なりけり

切先に集まる視線聖菓切る

どの子にも朝の光やクリスマス

初写真主役泣かせてしまひけり

春燈の句

安立 公彦選

紅葉踏む大和と伊勢の国境

三重 上野 進

たましひの溶けて戻らぬ炬燵猫

槍衾めく木蓮の冬芽かな

白菜を孫のごとくに乳母車

初鴉珈琲ひと口タイの朝

初鷄や地球憂ひて高く鳴く

電子便に座を譲りたる賀状かな

初歌留多タイ人の子ら生き生きと

初雪やサンタが磨く赤い靴

初釜や折敷に落とす箸の音

業平の歌胸中に都鳥

虹色のセーターもらふ女正月

初電車日光連山晴渡り

二日早茶花探しの用伝ひ

東京 坂本依誌子

千葉 木村みどり

バンコク 大口 堂遊

味噌しやうゆ澄まし日替り雑煮かな

読初やときをり白湯を含みつつ

妻乗せて救急車往く師走かな

大安を退院日とし冬日和

正月や退院証明治癒とあり

妻見舞ふ子とその子らと初笑

母を真似子の触れてゆく冬芽かな

大空へかざす輝き初氷

秦野路や実朝首塚冬ざるる

眠りぬる山に真向かひ一事決む

誰が呉れし柚子湯に浮かぶこの体

雪吊を拒み荒城の松の幹

そばを打つ音を継ぎけり除夜の鐘

手棒の己が掴みし卒寿の春

福島 物江 康平

東京 小林 文良

福島 室井津与志



余言

安立公彦

斑鳩の一塔遠き枯野かな

佐藤 信子

一枚の地図がある。西は二上山から西は室生寺、北は浄瑠璃寺から南は吉野山西行庵に至る、奈良大和路の地図である。この地図は、ガイドブックの付録として付いていたもの。まれに開いて眺める、赤い文字で記してある例えば、当麻寺、飛鳥寺、長谷寺、東大寺、唐招提寺などの名は、訪れた折の景とともに、懐かしくよみがえる。もとより、法隆寺もその一つ。斑鳩の里である。

この「一塔」は回廊を待す五重塔か。その姿は、南大門からも高々と見える。いま作者は斑鳩の里を訪れるべく、一面の枯野を歩む。「一塔遠き」に、塔と再会の心躍りが押えた表現で、それ故印象深く記されている。この句を見ると、奈良周遊の思いが湧き立つ。

宿木をあらはに銀杏枯れ立てる

山内 四郎

「宿木」即ち寄生木は、他の樹木、主として広葉樹に寄生する木。その広葉樹、ここでは公孫樹が落葉すると、「宿木をあらはに」という状景となる。樹木はこういう宿木を自らの動きで払い落とすことは出来ない。この句、枯木となった銀杏に、常緑の宿木のみどりが、あらわに絡む。「枯れ立てる」に作者の思いがこもる。

献杯は鱧酒と決め師の忌かな

鈴木 鳳来

寒月や胸に余韻の平家琵琶（櫻桃子志）

久保 久子

成瀬櫻桃子先生が逝かれたのは、平成十六年十二月十四日、七十九歳だった。二年前の一月、長女的美菜子さんが逝去され、殆どそのご不幸と重なるように、先生ご自身も体調を崩され入院中だった。

ここに掲げた二句は、それぞれ櫻桃子先生への追悼句である。前句。この「献杯」はもとより先師を偲んでの杯。「鱧酒」は先師との思い出の酒か。「決め」に櫻桃子先生への深い思いが感じられる句である。

後句。「平家琵琶」はもとより、櫻桃子先生の、へ十六夜や海の底より平家琵琶に由来する。この句、平成十四年九月、下関の赤間神宮境内に先生の第三句碑として建立された。史実を背景とする秀句である。「胸に余韻の」が

作者のこの句への思いの深さを語る。

丸善のアテナインキや漱石忌

加藤 良子

この句の初見は昨年十二月の本部句会だった。何とも懐かしい思いがして頂いた。「丸善」、「アテナインキ」が十二月九日の「漱石忌」とよく合う。個有名詞のみの句としては、みごとに作品である。

いつも利用している書店に、丸善習志野店がある。私の使っているインクは、「ペリカン」。先日、アテナインキの有無を尋ねたら、現在は置いていないとのことだった。

小春日やならぶ夫なきおのが影

中野さき江

中野英伴さんが逝かれて七か月が過ぎた。早いものだ。作者はいま初冬の日をあびて所用の歩を進めている。何気なく道に写る自分の影を見て、一瞬立ち止まる。そこにはかつての日々、常に一緒だった英伴さんの影がない。「ならぶ夫なき」に強い衝撃を覚え、「おのが影」のみ写る地面を見つめるばかりだ。「ならぶ夫なきおのが影」は、夫恋いの域を乗りこえたみごとに表現である。

世を遠くおもふ日のあり枇杷の花

太田佳代子

この句にはうっかりすると読み過ぐす大事な言葉がある。

上五の「世」である。世を辞書に当たると種々の解釈が出て来る。時代、時節、時、生涯、社会、生活、定め等々。それらのどの言葉を当てても、この句に合致する語は見当たらない。しかし一句を誦すると、鑑賞に何の不都合も感じない。何となく分かる。こういう表現の句もあつていいのだ。或る人は「時節」と言い、また「定め」と取る人もあろう。その人にとつては、その言葉が合うのだ。

思い返した末、私はこの「世」に「わが身」という言葉を当てた。私にとつてはそれが最もふさわしい。己の来し方を遠く思う日は、誰にもあり得ることだ。

先づ記す米寿の誓ひ新日記

廖 運藩

「新日記」という季語は、俳句に携わる人にとつては、ことに新年を代表する言葉の一つと言えよう。作者はその第一頁に、「米寿の誓ひ」を記す。米寿ともなると、一歩身を引くという人の多い中、これは立派な志である。

作者は台北俳句会の指導者として、活躍されている。季語という、俳句にとつて例えば能における「ワキ」役のような存在の言葉が、日本と地理的な差異のある台北での俳句実作では、困惑の因となることもあるだろう。先年訪れた台中で、九月に早苗田を見たことなど思い出す。

しかし掲出の句は、緯度の差を越えるもの。「米寿の誓ひ」は国を問わない。益々のご健勝を祈るのみ。